
吟遊詩人は語る ～二国大戦～

鹿野 魁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吟遊詩人は語る ～二国大戦～

【Nコード】

N2342A

【作者名】

鹿野 魁

【あらすじ】

サクンテウス国の領域内南西に位置するサトラ村の宿屋「狗の顔」の二人の客がやってきた。

序章

天地歴 1356年

サクンティウス共和国の領域のなか、南西に位置するサトラ村。

村の男たちは出稼ぎをしに行く者と、村で農作業をする者と分かれていた。女は季節に合わせた小物や服などを作り、出稼ぎに出かける男たちに預けて売ってもらっていた。特産物はこれといってなく、たまに物好きな旅人や商人などが二、三人くる程度である。

その村に唯一ある宿屋は、一階は酒場兼食堂になっており、二階が宿屋になっていた。

宿屋の名前は「狗の顔」。ターツツエ夫妻が経営している。

ここで畑仕事をして疲れた体を癒しに、村の男たちが宿屋に集まったり、この村付近の情報を知りたい旅人や商人、話し好きの人々が杯さかずきをかわすのである。

昼、男たちが仕事にでている間、「狗の顔」では吟遊詩人が客になった。

夜も更けた頃。

今日も「狗の顔」では村の男たちが、酒を飲み、どんちゃん騒ぎをしていた。

そして、傭兵が客となった。

「狗の顔」からは客がきたこともあり、いつにも増して男たちの声が聞こえてきた。

一章 酒場

「おーい。もしかしてあんちゃん吟遊詩人かい？」

がやがやとうるさい酒場で、ひときわ大きい声が響く。

声をかけたのは薄茶色の髪をざんばらに切り、同じ薄茶紙の髭を適度に伸ばした30代後半ごろの男だった。

声をかけられたのは、深緑が混ざった黒の髪の二十歳を過ぎたばかりのような青年だった。耳脇の髪を一房だけ肩過ぎまで伸ばし、見たことの無い服を着ている吟遊詩人だった。

「そうですか」

酒場で行き交う声で消えないように、吟遊詩人は声を張り上げて答えた。

男は机の間を縫うようにして、吟遊詩人の元までくるところ言っ

た。

「二国大戦を謡ってくれねえかな」

断る理由もちろん無いので吟遊詩人は微笑んで承諾した。

「なんだなんだ」

「なにやっつてんだバギー」

「おっ、兄ちゃん。何を謡うんだい」

「おーい、ここの兄ちゃん吟遊詩人みたいだぞー」

始めに詩を頼^{うた}んできた男　バギーと言^うらしい。　の大声を

聞きつけた男たちが吟遊詩人の元に集まってきた。

「二国大戦について謡ってほしいと先ほど、そこのお方に頼まれたんです」

何を謡うんだい。という男の質問に吟遊詩人は答えた。

「おまえはなんと聞いてもあきねーなーほんとに」

「うるせえっ」

はははとまわりの男たちが笑う。

「オレたちも聞いてていいんでスカね？」

そのなかで二十代ぐらいの男 仮に男Aとする。 が吟遊詩人に聞く。

「オレらだって二国大戦聞きたいし…」

「うん。うん。」

男Aの言葉を聞いた男たちがいつせいにうなずく。

「料金が払ってもらえるならいいですけど」

吟遊詩人が答えると同時に、男たちが歓声を上げる。

「それで、料金っていくらなんだ」

男Aたちに出番を取られていたバギーが聞く。

「基本的にはこれと言って決めてないので、いくらでもいいですよ。お客さんにはいつも、私の詩を聞いてもらってから決めてもらいます」

それを聞いた男たちから質問がとぶ。

「そんなん生活できてんのか？」

「はい」

「払わなくてもいいって事でスか？」

「私が歌い終わったあとに、そう思っただしたら」

「本当にそれでいいのかい？」

「はい」

吟遊詩人は質問に、それが地なのか微笑みながら答えた。

「ほかに質問が無いようなので、謡ってもいいですか？」

男たちに反対が無いようなので吟遊詩人は謡い始めた。

昔々の物語…

二章 詩（うた）

吟遊詩人は歌い続ける。

昔々の物語 皆さん生まれる前のこと

二つの国の争いが 200年前に起きました

一つの国はレト二国

一つの国はクラタント

昔々の物語 200年前のことでした

レト二の国では白髪はくはつの

クラタントでは金髪の

青年が一人おりました

白色の髪の青年は まだまだ二十歳になつてなく

金色の髪の青年は やつと二十歳をすぎた頃

白色の髪の青年は 生きるために戦つて

金色の髪の青年は 守るために戦います

……

……

男たちは息をすることも忘れ、ただその詩うただけがこの世にある娯
楽というかのように、吟遊詩人の詩に聞き入っていた。

（まったく、おもしろいことがあるってこういうことかよ）

詩に感動している男たちとは違い、明らかに詩に対して無感動な青年が一人、その場から少し離れた場所でテーブルに頬杖を着いた格好で座っていた。

青年は二十歳過ぎぐらいだろうか。背中中程まで延ばした白髪をうなじ近くで藍色のひもで結び、緑色を中心とした全体的にゆったりした服を着ていた。生業の道具なのか、剣が腰に吊りあっていた。（こうなったら最後まで聞いてやるか）

青年は詩が始まった頃からいらいと落ち着かない。どうやらこの詩に少なからず嫌悪感を覚えているようだ。だからといって二階の部屋に引き上げるでもなく、文句を言うでもなくおとなしく詩を聞いてる様は吟遊詩人の腕前を試しているようでもあった。

三章 歴史

『二国大戦』とは、年前の年にレト二国とクラタントの間で起きた大規模な戦争である。両国による攻防は20年にもおよび、とうとう206年前の1150年にレト二国の勝利というかたちで二国対戦は幕を閉じた。

そのとき戦った兵士の中で、特に勇敢に戦った兵士が一名ずつその国で英雄として名を馳せた。

レト二国では、白髪の少年が。

クレタントでは金髪の青年が英雄の称号を得た。

白髪の少年はグエン「S」ヴェルダスといい、異例な人生を送ってきた。13歳のころに最年少兵士として入兵し、二国大戦では12竜隊（俗に言う12番隊）の隊長を勤めていた。始めはその幼さから仲間からも馬鹿にされていたが、その戦いぶりは凄まじく、敵には容赦なく剣を振るった。その戦いぶりから仲間からは畏敬の念もこめて「戦いの化身」と呼ばれていた。そのころには、彼が戦いに参加するというだけで、全体の士気が大幅に上がったという。しかし、なぜか彼は、兵士を辞めるまで結局誰にも心許すことなく過ごしていたという。

金髪の青年はティンダ「ラ」ローグルといい、彼もまたグエン同様異例な人生だった。ティンダは公爵家の長男に生まれた。普通、貴族に生まれたものは軍隊などに入らないのだが、ティンダは親に勘当される事などに気にせず、15歳で軍隊に入った。彼は、我流だったがそれを感じさせないほど、剣の腕はすばらしく、さらにその人柄の良さで人気を集めていた。当時彼は第3番部隊隊長を務めていた。

レト二国、クレタントの両国は、二国大戦が始まるまでは貿易などで交流を深めていたが、ある時、クレタントに旅行に行ったレト二人の親子が、軍の馬車にひき殺された事件があった。誰も親

子を助けようとしなかった。この証言をどこから耳にした親子の親族たちがクレタント軍に向かって武力で抗議し始めたことから戦は広がった。

始めは激しい攻防が繰り返されていたが、中盤になって9竜隊隊長のウヴィール病死、さらに裏切りによるグエンの戦死が続いたことによりにより、レト二国の士気は急減。その隙に追い込んだクレタント軍により、一度レト二軍は潰されかけたが、死んだと思っていたグエンによる奇襲が功を成し、レト二軍の勝利に終わった。

勝利品はレト二国とクレタントの間にある湖と、いくらかの高価な貿易品のはずだったのだが、当時のレト二国王エオリー三世がクレタントとの和平を望み、勝利品の半分をクレタントに返し、レト二国とクレタントは平和条約を結んだ。

このエオリー三世の偉業により、いまでもレト二国とクレタントは今でも争いごと無く関係が続いている。

四章 通曉

……。
……。

吟遊詩人は長い長い詩を長い長いときをかけて謡った。どうやら、自分でも満足いったようでも達成感あふれる顔つきをしていた。そのときに白髪はくはつの青年は吟遊詩人に挑戦的に微笑まれたような気がした。

「すげえじゃねえか、あんちゃん」

「オレ、感動しました」

「俺たちは結構な量の詩うたを聞いてきたが。失礼ながらここまですげえとは思わなかったよ」

一息置いた後、客たちは吟遊詩人に惜しめない拍手を送り、一人が払えるだけの金額を吟遊詩人に渡そうと財布のふたを開けたが、吟遊詩人に『今日は今までで一番うまく歌えたのでむしろこの機会をくれたあなたたちに私は感謝しています。なので料金は要りません』と言われ、しぶしぶ財布をしまった。

「おら、俺らのおごりだ。あんちゃん飲め飲め！」

「どうせ朝までもう少ししかないし、飲み明かしましようよ」

「おつ、いいなあそれ」

「どうだい詩人さん？」

そういつた男の手にはもう酒がついであるジョッキが握られており、渡す準備は万端、後は吟遊詩人の言葉を待っただけとなっていた。「ではお言葉に甘えて」

そう吟遊詩人が言うと同時に男からジョッキが渡された。

「兄ちゃんの華麗なる詩うたに乾杯！！」

「「乾杯！」」」

「あーあ、こんななるまで飲んじまって」

酒場では男たちが酔いつぶれて重なるようにしていびきをかきながら眠っていた。

「あんたも大変だったろ？こいつらに付き合っの」

「いえ、とても楽しかったです」

吟遊詩人も付き合って相当な量を飲んでいるはずなのに、飲む前と変わらない態度でそこに居た。しかし、周りの男たちが酔いつぶれているせいで身動きが取れなくなっていた。

「そうかい。それは良かった」

そういいながら女主人は手馴れた様子で机をどけ、床に男たちを寝かせていった。

「その剣士さん。悪いけどあんたの傍にある毛布、こっちに投げてくれないかな」

「あー……、あれか？」

白髪はくはつの青年が少し周りを見ると、後ろに毛布が何枚も重ねておいてあるのが見えた。

「そうそれ」

青年はそこまで歩いていくと毛布は投げにくい、と判断したのか、わざわざ女主人の傍まで歩いて行って毛布を放った。

「ありがとうございます」

青年はせっかく立ったのだから、と男たちを床に寝かすのを手伝い始めた。

青年に周りの男をどけてもらった吟遊詩人も、身動きが取れるようになったので男たちに毛布をかけるのを手伝い始めた。

「すまないね。お二人さん」

「別にいいですよ」

「構わない」

その後は主に女主人を中心とした世間話をしながら三人で後始末をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2342a/>

吟遊詩人は語る ～二国大戦～

2010年10月11日21時26分発行